パーソナリティ特性と統制感の所在における交互作用について

松田　浩平

自己統制感の所在によって，パーソナリティ特性が異なるか，大学生196名(男性44名，女性152名)を対象に調査研究を行った。自己統制感(LOC)スケールは，水口(1984)の自己統制感スケールを西野(2003)が改変したものを使用した。パーソナリティ検査は，村上・村上(1999)による主要5因子性格検査を使用した。その結果，LOC得点の平均値は過去の研究に比べて高く外的統制型に偏っていた。また，LOC得点と性格の主要5因子では，努力感(-)と協調性(A)，自己統制(-)と建前回答(Att)・勤勉性(C)・安定性(N)・知性(O)でいずれも負の相関を認めた。また統制感の所在による主要5因子の尺度得点から，内的統制型は，建前を気にするものの勤勉性と知性が高い傾向があることが示された。また外的統制型は，虚構尺度の得点が高く協調性が極めて低く安定性も低いことが示された。さらに，自己統制感によるクラスタ分析の結果から，受動的な努力をしぶしぶ続ける運命論者的な努力家的なタイプ，周囲の様子に付和雷同して今を楽しく生きる享楽的なタイプ，自分は能力があるので今すぐ物事にとりかからなくてよいとする非現実性を追い求めるタイプがあった。これらの結果より，大学生の自己統制感は，パーソナリティ特性による各人の行動傾向とは異なり，個人の信念としての内発的動機づけへの障壁が示唆された。

1．序論

一般的に人は自分に関わる出来事が自分にもたらす結果について，原因を自分自身に関係する原因に帰属するか，それとも自分以外の原因に帰属するかという傾向があると考えられている。このような考えは，Weiner, B.(1972)によれば原因帰属と呼ばれ，自分の行動の結果の原因をどこに求めるかを意味している。さらに，成功・失敗に関する原因帰属では，Weinerのモデルがスポーツや仕事や勉学の成果に関することで研究モデルとして引用されることが多い。Weinerによれば，統制感の所在を内的要因・外的要因と安定・不安定の2×2に要因を配置している。内的要因では，安定要因としての「能力」，不安定要因としての「努力」が示されている。外的要因では，安定要因としての「課題の難易度」，不安定要因として「運」が示されている。Weinerのモ

デルによれば，成功の原因を安定的で内的なものである能力に帰属すれば，次の機会に訪れる課題や行動に対する期待と価値が最も高くなり，次の機会に対する動機づけが最高になると考えられている。いっぽう，失敗の原因を，不安定で内的なものである「努力」に帰属することが次の動機づけを高めるとされている。しかし，実際の場面では，動機づけを高めるような原因帰属のスタイルは個人差が大きく，原因帰属のスタイルに個人差があるとされている。

また，Rotter, J. B.(1966)は，個人が行動や評価の原因を自己や他人のどこに求めるかという傾向を統制の所在(Locus of Control)としている。もともとは，社会的学習理論の中で提唱した概念で、統制の所在と訳されている。ある行動と報酬・罰という強化の関係において、ある原因帰属の一般化を行うことにより、特徴づけられる認知様式あるいはパーソナリティ特性を指す。これによれば，統制の所在は，原因を自分自身の内側に求める内的統制と，原因を自分自身の外側に求める外的統制があるとされる。内的統制は，良くも悪くも自分のせいと考え，自分がよい結果を出せば，自分の能力や努力を褒め，悪い結果を出せば，自身の努力や能力を責めるとされている。外的統制は，結果が良くても悪くても有力な他者や環境のせいと考え，自分がよい結果を出せば，他者の援助や運の良さなどを褒めるが，悪い結果になれば他者による援助の欠如や運の悪さを責めるとされている。

水口(1984)は，原因帰属のスタイルに個人差があることを前提として，自己統制感とは，個人が自分の統制感を自己評価するもので,「努力観」,「刹那性」,「自己統制(セルフコントロール)」,「運・好機志向」,「社会的力量性」の5因子から構成されているとした。さらに，これらの5因子をもとに，内的統制と外的統制を両極とした尺度化ができるとしている。内的統制は，行為と成果の関連性を認知でき，事象が努力・能力・自分自身の内的特性によって統制できるという信念が強く，自力本願で自信と能力感が高く，情緒的にも安定している。いっぽう，外的統制は，行為と成果を関連づけることに無関心で，事象が運や好機，社会的制度，他者などによって統制されているという信念が強く，他力本願で劣等感が強いため受動的で不安傾向が強い。さらに，5因子はそれぞれが内的統制と外的統制のバイポーラスケールになっているとしている。努力観では，努力は報いられるという内的統制と，努力しても無駄であるという外的統制である。刹那性では，将来を展望して計画的に行動する内的統制と，出たとこ勝負で目先のことに価値を置き満足の遅延ができない外的統制である。自己統制では，自立性があり自分に厳しく忍耐性がある内的統制と，人当たりは良いが動揺しやすく他者依存の傾向が強い外的統制である。運・好機志向では，自分の行為に責任帰属をして経験を生かす行動様式を好み成功を自分の努力・能力に期待する内的統制と，自己以外に責任帰属をして運やチャンス任せの行動様式を好み，成功は運・不運にまかせる運命論者の傾向がある外的統制である。社会的力量性では，社会的な有能感があり社会的影響を及ぼせる自信が強く環境を支配する事を好み，逆境に強いとされる内的統制と，社会的な無力感や弱小意識が強く逆境に弱く同調的な行動を好む外的統制である。これらをもとに大まかな分類をすれば，内的統制は事物の生起を自分の能力や努力に期待するタイプで，外的統制は運やチャンス・有力な他者に期待するタイプである。水口(1984)は，統制の所在について，パーソナリティ特性に含まれた自己イメージを含んだものとして「自己統制感の所在」または「統制感の所在」とした。本稿では「統制感の所在」に統一した。このように統制感の所在は，人が環境

に適応しながら発達した過程で獲得した行動特徴でもあるため，パーソナリティとの関連性が高いことが予想される。

自己認知の観点からみれば，統制感はパーソナリティ特性の側面からも検討することができる。さらに，パーソナリティの特性論は，時代背景や社会的な価値観の求めによって変遷を遂げてきた。現在では基本的なパーソナリティ因子は，「外向性」「協調性」「勤勉性」「情緒安定性」「知性(経験からの解放)」の5因子であるという仮説が，アメリカをはじめ，地域や文化を越えて検証されつつある。この仮説をビッグ・ファイブ(Big Five)もしくは主要5因子モデルと呼んでいる。研究者や被験者や国や地域が異なっても，これらの5因子が繰り返し出現することが因子論的な研究で確認されている。Fiske, D.W.(1949)は, 男性128名にキャテルの35対の特性用語から22対を抜粋し，評価尺度を作り，次の3つの方法で対人評価をさせた。1)スタッフの評価：4名の評価者が週の半ばと終わりに討議して評価データ。2)参加者の自己評価。3)仲間によって評価された他者評価。これらの3種類のデータについて，それぞれ別々に因子分析が行われた結果，類似した5つの因子が出現することが判明した。Fiskeによれば,「社会的適応性」「情緒的統制」「協調性」「探求的知性」「独善性または主体的な自己主張」に関する5因子としている。しかし、これらの結果は当時のパーソナリティ特性論の研究者達からは、殆ど注目されなかった。その後になって，Goldberg, L.R.(1990)は，第1研究で，パーソナリティ評定語とされる形容詞1710語から出発し，大学生187名に，自己評定の正確さを9段階で評価させ，75のクラスタに分類した。第2研究では一般的な形容詞479語を類義語のクラスタ133に分類し，自己評定と仲間評定のいずれの場合も5因子になったとしている。第3研究では，形容詞339語を類義語のクラスタ100に分類(3～4語を一つにまとめたもので，代表語が一つ選ばれている)。自己評価と友人の評価のデータを別々に因子分析すると，ほとんど同じ内容と思われる5つの因子が抽出された。さらに，Hofstee, W.K, DeRaad, B., & Goldberg, L.R.(1992)は，主要5因子を代表する形容詞を選びなおし，いずれもほとんど同一の5因子が得られたとしている。こうして抽出された，代表的な形容詞100語は他の研究者にとって有益なものとなっている。

この代表的な形容詞100語をもとに柏木(1997)や村上・村上(1997)によって日本語でも同様に，パーソナリティの主要5因子モデルが提唱されている。これらをもとに主要5因子性格検査が作成されている。中でも，下仲ら(1999)によるNEO-FFIと，村上&村上(1999)による主要5因子性格検査が，標準化された性格検査として広く市販されている。このうち，村上&村上(1999)による主要5因子性格検査は信頼性と妥当性に関する検証が十分であるためパーソナリティ研究に引用されることが多い。いっぽう，NEO-FFIは，青年期から老年期まで幅広い年齢層をもとに標準化されており，発達研究や老年研究など臨床場面を含めた様々な領域で利用されることが多い。また，これらの因子は，数年間にもわたって，頑健で安定しているとされている。また，これらの5因子は，ほぼ直交解となることから最終的なパーソナリティ記述因子である可能性が示唆されている。

パーソナリティの主要5因子では，気持ちが外に向いているか内に向いているかを示す外向性，他人と心を通わせることに気持ちが向いているか，自分のことを優先しているかを示す協調性，物事を成し遂げる熱意や実際的な感覚の有無などや達成動機の強さやコントロールの仕方を示す勤勉性，気分や感情が安定しているか不安定なの

かを示す情緒安定性，好奇心や思慮深さなど内発的動機づけの強さや洗練度を示す知性がある。松田・佐藤(2006)は，職業選択や職業興味に関する研究で，パーソナリティ主要5因子のうち勤勉性と情緒安定性において統制感が外的統制か内的統制によって異なることを見いだした。内的統制では勤勉性と情緒安定が高く，外的統制ではこれらがいずれも低い結果となっていた。これらのパーソナリティ因子は，いずれも個人が自分を取り巻く環境の認知と関わっていることは明らかである。臼井(1975)は，認知スタイルの1つであるReflection Impulsivityに着目し，その基準測度であるMFFに対するR(Reflective)，I(Impulsive)両群の課題解決の過程における各群の視覚的探索行動に焦点をあてて分析を試みた。その結果，自分に関わる要因として積極的な視覚的探索行動を展開する場合は失敗を恐れず成果を高めるが，受動的に課題を受け止める場合は誤りを回避する傾向が強く全体の反応が抑制されることを示している。岡田(2010)は，メタ分析によりパーソナリティ尺度を用いた研究に関する87論文115の相関行列を収集し，それらの相関行列から母相関係数を推定したところ，隣り合う動機づけ間の相関係数は自己決定的なほうに進むにつれて大きくなる傾向がみられた。このことから，社会学習理論としての動機づけの次元について，自己決定性と統制的動機づけの2次元が見いだされた。

すなわち，自己統制感としての統制感の所在は，自己決定に関わる諸行動への態度に大きな影響を与えることが考えられる。さらに，これらは個人のパーソナリティ特性と根源的に共有するものが大きいと思われる。しかし，これまで統制感とパーソナリティ特性に関わる研究が少なかったのは，一般的に統制感尺度とパーソナリティ特性の間に相関が低く，研究成果として報告することを躊躇せざるを得ないことが多かったためと考えた。パーソナリティ特性と統制感の所在は，研究デザインにおいて従属変数的な扱われ方をする場合が多く，その関連性について報告は少ない。しかし，動機づけと深く関わる統制感の所在をもとに，学生指導や研究への援助を行う場合について考えた場合，学生などの個人差を無視して指導を進めることは好ましくない。

そこで，自己統制感がパーソナリティ特性と，それらの質問紙による測定についてどのような関わりを持っているのか，特に相関があるのか，ないのか含めて調査を試みることとした。ただし，本研究では行動指標や生理指標を用いた学習理論や行動理論からのパーソナリティ測定については，含めず質問紙による研究の範囲に留めることとした。このような社会的学習理論にかかわる問題は，本来なら行動観察，実験的方法で検証されるべきであるが，質問紙による心理尺度を用いた方法でも検討が可能であると考えた。

2. 目的

大学生・短期大学生においては，パーソナリティ特性の可塑性が考えられる。そのためパーソナリティ特性のうち主要5因子モデルなど包括的な特性とは異なる面としての自己統制感に注目した。そこで，本稿では，パーソナリティ特性と自己統制感が，関連するものなのかどうかを探査的に検討した。まず，自己統制感の所在で，自分が関与するか関心のある事象への原因帰属が，外的統制か内的統制かでパーソナリティ特性が異なるかについて検討した。さらに統制感の所在を，努力感，刹那感，自己統

制感，運・好機指向性，社会的無力感の5要因からみた場合の統制感のスタイルにある程度のまとまりをもった傾向があるかどうかを検討した。これによって質問紙検査によるパーソナリティ測定の結果を歪める要因とされる，虚構尺度，建前回答がどのように異なるかを検討した。併せて，統制感の所在やスタイルによってパーソナリティ特性が異なるかどうかを検討した。

これにより，質問紙検査の結果を歪める要因として，質問紙への防衛的態度や社会的望ましさに加えて，統制感の所在が関わっているのかどうかを検討した。

3. 方法

3-1. 調査対象

首都圏にある中堅総合大学の教職課程(中等教育)2～3年生，首都圏にある文科系女子大学の3年生，東北地方にある短期大学の福祉系学科1年生を対象とした。今回の調査では，学科差や学年差は考慮せずに，尺度感の関連性に注目した資料の収集を行った。倫理的配慮として，調査前に協力者に以下のことを伝えた。1)研究以外の目的では使用しない，2)個人の結果が特定できないように配慮している，3)調査に対して協力できない場合は拒否しても不利にならないことを伝えた。いずれも，心理学，教育心理学，発達心理学など心理学系授業の授業内で実施した。さらに，この結果に基づいて教育方法の改善に役立てることを伝えて了承が得られた協力者のみに回答してもらった。

この研究の概要と目的を説明し調査を依頼した211名のうち，調査へ同意を得て有効な回答が得られたのは，196名で男性が44名，女性が152名で，女性の方が多いサンプルとなった。

3-2. 質問紙

フェイスシートとして，大学の所属している学部・学科，年齢，性別を答えてもらった。しかし，これらについては分析のなかで性差以外の項目は引用しないことを調査協力者に伝えた。

自己統制感は，水口(1984)の項目を西野・松田ら(1988)が改変し，西野(2003)に掲載された尺度を用いた。質問項目は，30項目の2件法で，「努力観」，「刹那性」，「自己統制(セルフコントロール)」，「運・好機志向」，「社会的無力感」の5因子に各6項目が割り当てられ，これらを総合した得点が統制感の所在として得られる。西野(2003)によれば，統制感の所在(LOC)は総合得点(0～30点)として得点が大きくなるほど内的統制から外的統制になる。このうち，0～10点が内的統制型，11～30点が外的統制型とした。

パーソナリティの主要5因子は，村上・村上(1999)による主要5因子性格検査を用いて測定した。この検査によれば，性格因子である外向性(E)，協調性(A)，勤勉性(C)，情緒安定性(N)，知性(O)の他に虚構尺度(F)と建前回答尺度(Att)が得られる。これらの得点は，平均50，標準偏差10の標準得点として得られる。

3-3. 分析方法

無回答などの欠損値が多いデータや回答に信頼性を欠く恐れのあるデータは，分析の対象から除外した。既に標準化された尺度を用いているため，尺度得点を利用した。用いた尺度得点は，LOC，Att，F，E，A，C，N，Oの8尺度である。最初にLOCの得点分布を調べると，上位25パーセンタイルが21点，下位25パーセンタイルが13点であったため，LOCの得点が21点以上の場合は外的統制型，13点以下の場合を内的統制型として分類し，その他は中間型として分類した。

さらに，統制感の5因子の尺度得点をもとにWard法による階層的クラスタ分析の結果から，おおよそ3クラスタに分類できることが判明した。これにもとづいて統制感の5因子の尺度得点を用いてk-means法による非階層的クラスタ分析を行ない統制感スタイル3クラスタに分類した。

これらの結果を基に，統制感の所在の3段階(内的統制型，中間型，外的統制型)と性差を要因とした2要因の分散分析を行った。併せて，統制感スタイルによる3クラスタと性差を要因とした2要因の分散分析を行った。

4. 結果

4-1. LOC得点

LOC得点は，サンプル全体の平均が17.17で標準偏差は5.47となった。やや外的統制に傾いた結果であった。このうち，男性は44名の平均が17.89で標準偏差は6.15，女性は平均が16.97で標準偏差は5.26であった。この結果から，LOCスケールの平均値に有意な性差は認められなかった($t(194)=0.98$, *ns*)。表1にLOC下位尺度の男女別の平均値と標準偏差を示した。これによれば，LOCの下位尺度のうち努力感のみが，男性の方がやや外的統制という結果になり性差が認められた($t(194)=2.03$, $p.<.05$)。そのほかの下位尺度には有意な性差は認められなかった。主要5因子性格検査で測定された個人のパーソナリティ特徴は性差よりもむしろ個人差として考えた方がよいので，この後の分析は男女をプールして行うこととした。

表１．LOC下位尺度の男女別の平均値と標準偏差

性別	N	努力感(－) mean(SD)	刹那感 mean(SD)	自己統制(－) mean(SD)	運好機指向 mean(SD)	社会的無力感 mean(SD)
男性	44	3.64（1.78）	3.75（1.54）	3.68（1.83）	4.18（1.45）	3.09（1.70）
女性	152	3.00（1.85）	3.88（1.43）	3.57（1.77）	4.03（1.52）	2.94（1.69）

4-2. LOC得点と主要5因子性格検査の相関

LOC得点およびLOCの下位尺度と，主要5因子性格検査の虚構尺度(F)と建前回答(Att)を含め，外向性(E)，協調性(A)，勤勉性(C)，安定性(N)，知性(O)との相関を求めた。このうち知性は，NEO-FFIでは経験からの解放(Openness from Experience)を意味しており開放性(Openness)となっているが，本研究では村上・村上(1999)に従い知性とした。表2には，LOCおよび各下位尺度と，主要5因子性格検査の各尺度の相関を示した。

表２．LOC得点と主要５因子性格検査の相関

	努力感(－)	刹那感	自己統制(－)	運好機指向	社会的無力感	統制感の所在
F虚構尺度	.219	.044	.194	－.063	.229	.248
Att建前回答	－.231	.077	**－.370**	.009	－.256	－.276
E外向性	－.169	.137	－.181	.083	－.180	－.140
A協調性	**－.309**	－.010	－.241	.108	－.262	－.298
C勤勉性	－.071	－.077	**－.416**	－.026	－.080	－.223
N安定性	－.141	.149	**－.300**	－.012	－.268	－.211
O知性	－.036	.048	**－.383**	－.054	－.197	－.178

サンプル数N=196の場合，相関係数$H_0(r=0)$とした帰無仮説の棄却域は，$p.<.05$において$|r|>0.14$，$p.<.01$において$|r|>0.18$となる。表2によれば，LOC得点およびLOCの下位尺度と，主要5因子性格検査の相関の多くが有意ではあるが，効果量としての相関係数を考慮すれば，$|r|>.30$を意味のある相関とすることとした。これによれば，LOCにおいて努力は虚しいとする努力感(-)と，主要5因子性格検査の協調性(A)との間に負の相関が認められた。また，自己統制(-)と，建前回答(Att)・勤勉性(C)・安定性(N)・知性(O)との間に負の相関が認められた。これ以外には，目立った相関が認められず，このことから線形加算的な意味で，LOCと主要5因子性格検査には特別な相関はないと考えた。

4-3．統制感の所在と主要5因子性格検査

そこで，LOC得点が21点以上(Q_3)の場合は外的統制型(External), 13点以下(Q_1)の場合を内的統制型(Internal), 14～20点を中間型(middle)として統制感の所在を3つに分類した。この3分類に従って主要5因子性格検査の各尺度得点の平均と標準偏差を求め表3に示した。内的統制型(Internal)は53名(男性11名，女性42名)，外的統制型(External)は52名(男性15名，女性37名)，中間型(middle)は91名(男性18名，女性73名)であった。このことから統制感の所在による分類には男女差がなく，またLOC得点はやや尖度の高い分布になっていることがうかがわれる。村上・村上(1999)による主要5因子性格検査の尺度得点は，発達段階と性差を考慮した平均50(標準偏差10)のT得点に標準化されているため，そのまま使用することとした。

主要5因子性格検査の各尺度得点を従属変数として，統制感の所在(Internal, middle, External)と性別(M, F)で3×2の一般化線型モデルによる2要因分散分析を行った。虚構尺度(F)では，性差($F(1,190)=12.33$ $p.<.01$)および統制感による差($F(2,190)=9.11$, $p.<.01$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=1.12$, ns)は認められなかった。建前回答(Att)では，性差($F(1,190)=4.27$ $p.<.05$)および統制感による差($F(2,190)=9.72$, $p.<.01$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=1.36$, ns)は認められなかった。外向性(E)では，性差($F(1,190)=0.36$, ns)は認められず統制感による差($F(2,190)=3.88$, $p.<.05$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=0.19$, ns)は認められなかった。協調性(A)では，性差($F(1,190)=5.63$, $p.<.05$)と統制感による差($F(2,190)=8.76$, $p.<.01$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=1.83$, ns)は認められなかった。勤勉性(C)では，性差($F(1,190)=5.27$, $p.<.05$)と統制感による差($F(2,190)=3.70$, $p.<.05$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=0.13$, ns)は認められなかった。安定性(N)では，性差

($F(1,190)=4.97,\ p.<.05$)と統制感による差($F(2,190)=3.94,\ p.<.05$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=0.10,\ ns$)は認められなかった。知性(O)では，性差($F(1,190)=21.41,\ p.<.01$)と統制感による差($F(2,190)=3.46,\ p.<.05$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=0.62,\ ns$)は認められなかった。このことから，内的統制型は，建前を気にするものの勤勉性と知性が高い傾向があることが示された。また外的統制型は，虚構尺度の得点が高く協調性が極めて低く安定性も低いことが示された。

表３．統制感の所在（LOC）による主要５因子性格検査の得点（標準偏差）

LOC	N	F虚構尺度 mean(SD)	Att建前回答 mean(SD)	E外向性 mean(SD)	A協調性 mean(SD)	C勤勉性 mean(SD)	N安定性 mean(SD)	O知性 mean(SD)
Internal	53	53.5(11.2)	54.6(11.5)	50.8(9.3)	48.2(9.2)	52.5(7.2)	50.9(8.4)	52.9(8.3)
middle	64	52.4(10.1)	47.9(9.8)	47.1(8.5)	46.7(10.4)	49.1(8.9)	47.8(7.5)	50.6(9.3)
External	52	60.8(11.0)	47.1(9.1)	46.9(6.7)	40.6(9.0)	49.3(6.2)	47.2(7.0)	49.3(7.2)

4-4. 自己統制感によるクラスタ分析

統制感の5因子である努力観，利那性，自己統制，運・好機指向，社会的無力感の5つの尺度得点をもとに被験者をWard法による階層的クラスタ分析により分類した。類似性の指標はユークリッドの距離とした。その結果はToleranceの指標である重相関係数の平方が0.30付近でおおよそ3クラスタに分類されることが示された。これにもとづいて統制感の5つの尺度得点を用いて*k*-means法による非階層的クラスタ分析を行ない，統制感スタイル3クラスタに分類した。各クラスタのプロフィールを表4に示した。

表４．自己統制感によるクラスタ分析

Cluster	N	努力感(－) mean(SD)	利那感 mean(SD)	自己統制(－) mean(SD)	運好機指向 mean(SD)	社会的無力感 mean(SD)	統制感の所在 mean(SD)
1	83	1.71(1.24)	2.96(1.35)	3.30(1.67)	3.98(1.36)	2.35(1.20)	13.70(3.67)
2	64	4.77(1.18)	4.45(1.26)	4.78(1.19)	4.88(1.30)	4.69(1.13)	23.11(3.29)
3	49	3.45(1.49)	4.55(1.00)	2.55(1.78)	3.16(1.45)	1.80(1.19)	15.31(3.58)

表4によれば，クラスタ1は83名(男性19名，女性64名)で，やや運や好機に期待しているが自分は社会的に無力ではなく努力は報われるという内的統制型であった。つまり，自分は努力するが時の運には逆らわない受動的な努力者と考えた。クラスタ2は64名(男性17名，女性47名)で，典型的な外的統制型であった。クラスタ3は49名(男性8名，女性41名)で女性が多く，どちらかといえば内的統制型ではあるが，かなり利那的であるものの自分は無力ではないと感じているが努力には結びつかないタイプであった。つまり，自分には能力があるので必要になったらその時に応じて対応するというタイプであった。これらの分類結果は，サンプルにやや偏りがあるため，各クラスタに命名して分類することは避けた。

4-5．LOCクラスタと主要5因子性格検査

主要5因子性格検査の各尺度得点を従属変数として，3つのLOCクラスタと性別で3×2の2要因分散分析を行った。性差による主効果は，4-3で示した結果と一致するが，一般化線型モデルによる分散分析であるため誤差がLOCクラスタの主効果によって異なるため記載した。虚構尺度(F)では，性差($F(1,190)=12.50,\ p.<.01$)およびLOCクラスタによる差($F(2,190)=5.84,\ p.<.01$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=0.83,\ ns$)は認められなかった。建前回答(Att)では，性差($F(1,190)=4.41\ p.<.05$)およびLOCクラスタによる差($F(2,190)=4.19,\ p.<.05$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=0.22,\ ns$)は認められなかった。外向性(E)では，性差($F(1,190)=0.22,\ ns$)は，LOCクラスタによる差($F(2,190)=2.22,\ ns$)は認められず，交互作用($F(3,190)=0.18,\ ns$)も認められなかった。協調性(A)では，性差($F(1,190)=5.63,\ p.<.05$)とLOCクラスタによる差($F(2,190)=7.97,\ p.<.01$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=0.11,\ ns$)は認められなかった。勤勉性(C)では，性差($F(1,190)=5.75,\ p.<.05$)は認められたが，LOCクラスタによる差($F(2,190)=2.31,\ p.<.05$)と交互作用($F(3,190)=0.00,\ ns$)は認められなかった。安定性(N)では，性差($F(1,190)=6.23,\ p.<.05$)とLOCクラスタによる差($F(2,190)=7.02,\ p.<.01$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=0.18,\ ns$)は認められなかった。知性(O)では，性差($F(1,190)=22.22,\ p.<.01$)とLOCクラスタによる差($F(2,190)=4.03,\ p.<.05$)が認められたが，交互作用($F(3,190)=0.52,\ ns$)は認められなかった。

この結果から，どちらかといえば内的統制型に分類されるクラスタ1とクラスタ3は，

表5．LOCクラスタによる主要5因子性格検査の得点（標準偏差）

Cluster	N	F虚構尺度 mean(SD)	Att建前回答 mean(SD)	E外向性 mean(SD)	A協調性 mean(SD)	C勤勉性 mean(SD)	N安定性 mean(SD)	O知性 mean(SD)
1	83	54.1(10.4)	50.0(11.4)	48.0(8.9)	46.6(9.7)	50.2(8.4)	47.9(8.3)	51.3(8.7)
2	64	58.7(11.8)	46.9(9.3)	46.6(7.2)	41.5(9.8)	48.8(6.7)	46.8(7.0)	49.0(8.0)
3	49	51.4(10.3)	52.1(9.8)	50.0(8.9)	48.9(10.0)	51.6(8.4)	51.6(6.7)	52.6(8.8)

いずれも平均的なパーソナリティ特性を示しているが，運や好機に期待しているが自分は社会的に無力ではなく努力は報われるという内的統制型の人たちは，虚構尺度の得点がやや高いことから応答への自己防衛傾向があり，どちらかといえば自分を優先して感情が不安定なことがうかがわれた。いっぽう，同じ内的統制型でもかなり刹那的で自分は無力ではないと感じているが努力を信じない人たちは，応答が建前的で知性(経験からの解放)が高い傾向があることがうかがわれた。クラスタ2に分類される外的統制型の人たちは，虚構尺度の得点がかなり高く応答への自己防衛傾向があり，建前回答の低さから自分に独自な応答をして，やや内向的で，協調性がかなり低く，情緒も不安定な傾向があることが示された。

5. 考察

自己統制感の所在を測定するLOC得点は，17.17と外的統制に偏っていた。この結果は, 水口(1984)の結果や, 西野(2003)で示された基準とした松田・片山・松田(1997)の結果と比較して外的統制に傾いていた。今回のサンプルとなった協力者は，人文科学系の学科の学生が中心であったことと，先行研究に比べて外的統制が多かったことも考えられた。

また，児玉・石隈(2015)によれば，テスト不安とテストの成果に対する原因帰属について，中学生はポジティブな態度と対処回避の負の関連が強く，高校生はテスト課題対処と遂行目標の重視および学習の不安との正の関連が強いことが示されている。また，高校生は遂行目標の重視は高校終盤で下がり概ね学年が進むにつれて習慣的な積極行動とテスト課題対処は低くなるなど外的な統制傾向が報告されている。中学生はポジティブな態度と対処回避の負の関連が強く，高校生はテスト課題対処と遂行目標の重視および学習の不安との正の関連が強いこと，遂行目標の重視は高校終盤で下がること，概ね学年が進むにつれて習慣的な積極行動とテスト課題対処は低くなること，学校移行期あたりは充実感と統制感は低く学習の不安は高いこと，中学生の間にポジティブな態度を持つ群は減少してしまうこと，高校生になると学習のネガティブ感情を持つ群は減ると同時に学習以外のことに関心を持つと推察される群は増えること等が明らかとなった。また, 高校生になると学習へのネガティブ感情は減少するが, 学習以外の方向へ興味が向くとともに満足の遅延が未発達な結果となっている。このことから，LOC得点が外的統制に傾いている傾向が時代とともに進んでいることがうかがわれる。

LOC得点と主要性格5因子との相関では，LOC得点と内発的動機づけの傾向を反映した知性(Openness from Experience)との間に相関が認められることを予想した。これは，桜井・高野(1985)より，LOC得点と相関が高い内発的動機づけと性格との間に高い相関を示したためであった。しかし，実際にはLOC得点と知性(O)との相関は低い結果となった。これは，個人の行動特徴であるパーソナリティとしての知性は，個人の行動指向性である統制感の所在とは別の側面を示し共通性が異なると考えられる。つまり，日常的な興味関心の対象が，自分で選択しコントロールするのではなくメディアや学校教育を通じて提供されることも関係しているかもしれない。

LOCの下位尺度から分類された，クラスタのプロフィールから次の3つのLOCのタイプが示唆された。クラスタ1として分類されたタイプは，内的統制型ではあるが，自分は社会的に無力ではなく努力は報われるという統制感をもっているものの，行為の結果は運・不運やチャンスの有る無しに左右されるというタイプであった。すなわち受動的な努力をしぶしぶ続ける運命論者的な努力家タイプがイメージできた。クラスタ2として分類されたタイプは，典型的な外的統制型で，努力は報いられず，将来のことより今の自分が大切で，自分には能力が無く，何をするにも運まかせであった。すなわち周囲の様子に付和雷同して今を楽しく生きる享楽的なタイプがイメージできた。クラスタ3として分類されるタイプは，やや内的統制型ではあるが，今ひとときの出来事や快楽を求める刹那的で，努力が報いられるという信念は低いが，自分は無力ではないと感じていた。つまり，自分は能力があるので必要になったらその時に応じて対応するという非現実性を追い求めるようなタイプであった。これらの3タイプにおける，根本的な性格特徴における顕著な差は認められず，主要5因子性格検査で

測定されるパーソナリティ特性とは異なった一面を示すことが推測された。

以上の結果より，大学生の自己統制感は，パーソナリティ特性による各人の行動傾向とは異なり，個人の信念としての内発的動機づけへの障壁を感じさせた。与えられた対象に興味を示し，自分が求める興味関心よりも社会的に好ましいとされる規範や建前に忠実であることを求めるのではないかと感じた。大学における高等教育のあり方に問題を投げかける結果となった。自分から興味の対象を探索せず，従順に振る舞っているようにも見えるが，この主体性のなさを，真面目と評価しているのかもしれない。大学等の教員が，学生に嫌われることを恐れ，負荷の少ない課題を提示して，内発的動機づけが乏しく主体性のない真面目に見える学生に焦点をあてた教育指導を続けるなら，学生に創造性や独自性を養うことは難しいと考えた。

参考・引用文献

1. Fiske, D.W.(1949). Consistency of the factorial structures of personality ratings from different sources. Journal of Abnormal and Social Psychology, 44(3), 329-344.
2. Goldberg, L.R.(1990). An alternative description of personality the big-five factor structure. Journal of Personality and Social Psychology, 59(6), 1216-1229.
3. Hofstee, W. K., De Raad, B., & Goldberg, L. R. (1992). Integration of the big five and circumplex approaches to trait structure. Journal of Personality and Social Psychology, 63(1), 146-163.
4. 柏木繁男．(1997)．性格の評価と表現 特性5因子論からのアプローチ．有斐閣．
5. 児玉裕巳，& 石隈利紀．(2015)．中学・高校生の学習に対する態度についての研究．教育心理学研究，63(3)，199-216．
6. 松田浩平，& 佐藤恵美．(2006)．P-2219 職業志向性と自己統制感による主要性格5因子の差異．日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集，(15)，138-139．
7. 松田浩平，片山吉晴，& 松田美登子．(1997)．自己の教育性と統制感によるライフスタイルの分類 第2報 女子短大生と看護学校生との比較．日本教育心理学会総会発表論文集，(39)，289．
8. 水口禮治．(1984)．人格構造の認知心理学的研究 一 Locus of Control(統制の所在性)に関する疎－密仮説の提唱と検証．風間書房．
9. 村上宣寛，& 村上千恵子．(1997)．主要5因子性格検査の尺度構成．性格心理学研究，6(1)，29-39．
10. 村上宣寛，& 村上千恵子．(1999)．主要5因子性格検査の手引き，学芸図書．
11. 西野泰広，松田浩平，永嶋正俊，平井敏雄，川井昂，加藤史夫 & 石井政弘．(1988)．032E04 スポーツチームの管理とリーダーシップに関する研究 VII．ラグビー・サッカーチームの組織心理構造 (3．体育心理学，一般研究 A)．日本体育学会大会号，(39)，177．
12. 西野泰広(編)．(2003) 原因帰属(統制感の所在)の測定(LOCスケール)．こころの科学．東洋経済新報社．270-271
13. 岡田涼．(2010)．自己決定理論における動機づけ概念間の関連性；メタ分析による相関係数の統合．パーソナリティ研究，18(2)，152-160．

14．Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. Psychological Monographs; General & Applied, 80(1), 1-28.
15．桜井茂男, & 高野清純. (1985). 内発的―外発的動機づけ測定尺度の開発. 筑波大学心理学研究, (7), 43-54.
16．下仲順子, 中里克治, 権藤恭之, & 高山緑. (1999). NEO-PI-R. NEO-FFI 共通マニュアル. 東京心理.
17．臼井博. (1975). 認知スタイル(ReHection-Impulsivity)に関する心理学的研究 I. 教育心理学研究, 23(1), 10-20.
18．Weiner, B. (1972). Attribution theory, achievement motivation, and the educational process. Review of Educational Research, 42(2), 203-215.